

体験的に見たロシアの交渉形態に関する一考

徐 賢 燮

A Study of Russian Negotiating Behaviors Based on My Personal Experience

Hyun-seop SEO

The author of this paper, as a professional career diplomat, spent a five-year tour at the Korea missions in Tokyo and Moscow while contacting with various types of Russian representatives, such as diplomats, journalists, intelligence officials, etc. This paper attempts to analyze the Russian negotiating behaviors mainly based on the author's first-hand experiences acquired over the course of the aforementioned contacts.

It was found that the perceptions or views of negotiation differ greatly from some of the standard Western negotiations. This difference in views of negotiation between the two countries results in different tactics and attitudes in the course of negotiations.

Firstly, in general the term "negotiate" means to confer in order to come to a compromise. Nonetheless, Russians view negotiation as a struggle by other means refusing any form of compromise. They view compromise as a means by which those in inferior positions deal with those in superior ones. To them, compromising is a weakness that may be exploited.

Secondly, the Russian concept of time is that it is limitless. While Koreans are noted for their desire to reach speedy conclusions, Russians have taken advantage of these traits of achievement-oriented Koreans by employing delay tactics to aggravate Korean impatience and force their counterparts to concede in order to show progress back home.

Thirdly, the Russian side has shown a tendency to prefer general agreements as opposed to detailed agreements, and to interpret any loopholes or vagueness to the utmost in their favor. Russian expectations of negotiating derive from their view of the world, a view that passes through two distinctively important filters-the Marxist-Leninist ideology and political culture. It is advisable to acquire an understanding of Russian background, culture, and political system, and to build a mutual relationship of trust as reasonable negotiating partners.

The author contends that knowledge of Russian negotiating behavior is helpful in understanding North Korean negotiating behavior as the two countries share a number of similarities.

To conclude, negotiations with Socialist countries should be conducted with patience and from a long term perspective; and general agreements should be avoided and details be fixed to the extent possible. Last, but not least, any concession should be made on a quid pro quo basis.

Key Words: negotiation, compromise, political culture, general agreement, quid pro quo basis

一．はじめに

本稿は、筆者が1980年代末に駐日韓国大使館に勤務した時期および1990年1月末に駐モスクワ領事處 (the Consular Department in the KOTRA Representation)ⁱ の創設要員としてソ連に赴任し、1993年5月末に帰国するまでの間、ソ連・ロシアの外交官並びに情報機関関係者と直に接触、交渉した体験を基に、ロシア人の交渉行動様式を分析したものである。

本稿ではソ連とロシアという国名を混用しているが、1991年12月のソビエト連邦 (Union of Soviet Socialist Republics) の解体を基準とし、原則として解体以前はソ連、解体後の場合にはロシアと表記している。

当時は1988年2月に就任した盧泰愚大統領^{ノテウ}が、朝鮮戦争と東西冷戦を通じて不自然な関係にあった中・ソ等の社会主義諸国との関係改善を目指し、北方外交政策を打ち出した時期であった。

ソ連との折衝の一部は東京を舞台に行われ、当時韓国大使館の参事官であった筆者はその任に当たった。接触した主な対象は、東京ではソ連大使館の参事官並びに表向きは記者となっているソ連の国家保安委員会 (KGB) 関係者であり、モスクワでは外務省、共産党、クレムリンの関係者、それに学者や記者であった。ソ連の大統領や外務大臣との会談に陪席する機会も何回もあった。それらの際の使用言語 (working language) は日本では主に日本語と英語であったが、モスクワでは韓国語を使用するが多かった。ソ連の韓国専門家は多くが北朝鮮の金日成大学に留学し、その後は数年間平壤に勤務するのが通例となっており、韓国語で協議や交渉を行う上で何ら支障がないほど韓国語に精通していた。

筆者がモスクワに勤務していた当時の韓国とソ連の関係は、1990年6月4日のサンフランシスコにおける韓・ソ首脳会談をはじめ、同年9月国交正常化のための韓・ソ外相会談、同年12月盧泰愚大統領のソ連公式訪問、1991年4月ゴルバチョフ (Mikhail S. Gorbachyov, 1931～) 大統領の訪韓 (済州島)ⁱⁱ、1992年11月エリツィン (Boris N. Yeltsin, 1931～2007) 大統領の訪韓等、それこそ両国の関係が急速に進展した激変の時期にあたる。2000年7月にプーチン (Vladimir V. Putin, 1952～) 大統領が北朝鮮を公式訪問したが、これは旧ソ連時代を含めてロシア最高指導者による初の北朝鮮公式訪問である。1990年夏頃、あるソ連の研究員が突然1989年のソ・米マルタ首脳会談 (Malta Summit) の話を持ち出したが、当時は済州島が韓国のマルタになるとは推測さえもできなかった。

1992年12月、一党独裁体制の旧ソ連が崩壊し、政治的多元主義と市場経済を志向する独立国家共同体 (CIS)ⁱⁱⁱ が出現すると、その外交交渉形態もソ連のそれとは違う様相を呈するようになる。しかし、ロシア連邦ではもちろんのことその他の独立共和国も同様だが、外交交渉の主導権は依然としてソ連共産党や情報機関の出身者が掌握しており、これらの人々の思考方式は簡単には変わらないように思われた。従って、過去のソ連外交官の交渉形態を吟味することは全く意味がないことでもなく、特にソ連式外交交渉を模倣^{iv} している北朝鮮の交渉形態を理解する上で、ある程度の参考になり得ると考える。

二．ロシアの交渉行動様式 (negotiating behavior)

1．交渉観

ロシア外交官の交渉観はマルクス・レーニン主義の弁証法的唯物論に基づいて権威主義的であり、リスク回避的な政治文化の所産である。ロシア外交官の一般的な傾向としては、交渉とは国

益を守り前進させる手段と承知しているが、ギブ・アンド・テイク (give and take) という持ちつ持たれつの意識はなく、テイク・アンド・テイク (take and take) の原則を固守し、祖国に忠誠を尽くす構えを示す。ロシア語の辞書には英語の「compromise」(妥協・歩み寄り) に該当する「 」という言葉があるがこれは外来語であり、英語の「compromise」とは若干違ったニュアンス、つまり弱さの表現として否定的に捉えられているようだ。

英国の著名な外交史家であるハロルド・ニコルソン卿 (Sir Harold G. Nicolson, 1886~1968) が、「ソ連外交は外交ではない。それは何かそれ以外のものである」と指摘したように、ソ連外交における交渉 (negotiation) は西欧的な意味での交渉ではなく、交渉による闘争 (struggle by negotiation) であると言える。このような認識は、ソ連学界による伝統的な国際法の定義つまり国際法とは国家間の協力と闘争によって形成された法秩序である 一脈相通ずるものがある。

最近のロシア連邦外務省においては、ソ連時代とは異なり、現代の文明国家で一般的に認識されている国際規範 (international norms) と国際的慣行 (international practices) を可能な限り尊重する傾向が見られるようになった。しかし、外務省を除いた国防省等の部署では、依然としてソ連時代の交渉形態を維持しているとの印象が拭えない。

ロシアの外交官は職位の高低に関係なく、交渉前後の非公式な接触の過程ではほぼ例外なく弁証法的唯物論を論ずることが習慣化していた。外交交渉は弁証法的唯物論に忠実でなければならない、という強迫観念を持っていたようにすら感じられた。一例を挙げると、1990年6月4日のサンフランシスコにおける韓・ソ頂上会談で、盧泰愚大統領は韓・ソ国交樹立は両国関係の発展のために必要であり、朝鮮半島の平和と安全はもちろんのこと東北アジア全般の平和と繁栄にも貢献すると述べ、早期の国交樹立を促した。これに対しゴルバチョフ大統領は概ね共感を示したものの、「量が増えれば質的な変化をもたらすので、一步一步接近することが望ましい」と返答した。この考えは、「卵はある段階に至ると、殻とその中のヒヨコの間で矛盾が激化し、卵がヒヨコに質的に飛躍する」というエンゲルス (Friedrich Engels, 1820~1895) の弁証法理論に基づくものようだ。ゴルバチョフの言わんとするところは、経済・文化・人的交流の積み重ねが必然的に外交関係に発展するものであるから、国交樹立は急がず時間をかけて行うべきということであった。

この首脳会談の後、韓国側の記念写真撮影の提案に対し、ゴルバチョフは北朝鮮を意識したのが当初ためらうそぶりを見せた。しかし、世界が注目している中で写真の1枚も撮らずに終わると、歴史的な韓・ソ会談は失敗したという誤った印象を与えかねないという韓国側の説得でようやく写真撮影に同意したという。

2. 交渉形態の特徴

(1) 権威主義的姿勢 (authoritarian posture)

ロシアの交渉代表は、形式 (formality) がその内容 (contents) を規定するとみなして形式に多くの神経を使い、特使を派遣する際にはチャーター機を使用することが多い。これは秘密保持や当事者の身の安全への配慮、また交渉決裂や持久戦的な交渉に備える目的もあると思われる。また「規模は力」(size is power) という観念も強く、大規模代表団を派遣することを好む傾向がある。

ロシア側は実務的な交渉を推進する一方で、相手側の最高権威、即ち最終決定権者との意思疎通のチャンネルを構築することに絶えず努力する。いわゆる二重交渉戦術 (dual-track negotiating strategy) を駆使するのである。例を挙げれば、クレムリンは東京の韓国大使館とソ連大使館が定期的に接触しているにもかかわらず、韓・ソ国交樹立のための非公式接触の窓口としてノーボ

スチ通信社 (Novosti Press Agency) 東京支局長ドゥナーエフ (Vladislav I. Dunaev) を指定し、韓国大統領府につながるのある韓国人と接触させた^{vi}。1990年5月にソウルで行われる「元国家首班会議」には、ゴルバチョフ大統領の外交顧問ドブレニン (Anatoly F. Dobrynin, 1919~) ^{vii} を派遣し、盧泰愚大統領と会談させる予定であったという。

ロシア代表団の特徴としては、メンバーの中で強硬・穏健それぞれの立場を堅持する役割分担を事前に決めて交渉に臨むという点が挙げられる。強硬論者 (bad guy) は一貫して権威的で融通がきかない態度を見せる一方、穏健論者 (good guy) は交渉の内容すべてに精通するのみならず高度な専門知識を兼ね備えており、交渉の最終段階では「善意の調停役」を標榜して局面の打開を図ろうとするケースが多い。

しかし、ロシア代表団は強硬・穏健論者に関係なく、自ら裁量する権限を与えられていないために相手側の代案 (counter-proposal) に即座の決定 (spot-decision) を下すことが出来ず、絶えずモスクワに問い合わせをする。ロシア代表団が外務省・国防省等複数の部署によって構成されている場合は、単一の訓令ではなくそれぞれの部署ごとに訓令を受けて交渉に臨む都合上、首席代表の対応にも限界が露呈することが往々にしてある。ロシアの交渉代表者は慣例的な意味における「交渉者」とは呼べず、むしろ中央のモスクワで作られた見解および要求を伝達する強硬なメッセンジャーとみなすべきであろう。

1990年9月30日、ニューヨークにおける韓・ソ外相会談の際、^{チェホジュン} 韓国の崔浩 中外務長官とシェワルナゼ (Edward A. Shevardnadze, 1928~) ソ連外相との間に修交合意の発効の日程を巡って駆け引きがあった。崔浩中外務長官は9月30日の修交合意と同日発効を強く主張したが、シェワルナゼ外相は修交には異議がないものの、発効日は1991年1月1日とするのが新しく出発する両国関係にもふさわしいと述べた。これは建前であり、本音は北朝鮮が受ける衝撃を緩和する時間が必要と考えたためであろう。結局ソ連側は韓国の主張を容れ、事前に準備された発表文案に「1991年1月1日発効」と記されていたのを、シェワルナゼ外相が自らペンを取って「1990年9月30日」と修正・署名した^{viii}。極めて異例な出来事であり、シェワルナゼ外相の権威と政治的比重を反映したものと言える。当時の日本の新聞が9月30日の修交合意の事実を知らず「来年国交正常化」と謝って伝えるハプニングまであったが、事前に用意された内容を交渉当事者がその場で修正・決定するのは滅多にないケースであり、ソ連やロシアの外交に通じた記者たちは取材で得た文書の内容が土壇場で変更されるとは思わなかったのかもしれない。

ロシア側はたいていの場合、議題に関する自分達の立場を先に明らかにすることを避け、まず相手の提案を聞いてからそれに対応するやり方だった。ロシア側は、最初は相手側が到底受諾出来ない無理な提案をして、交渉が厳しく困難であるとの印象を相手側に与える。交渉の成否はあくまでも相手側の妥協の有無にあり、相手側の責任であると思わせようとするのだ^{ix}。

(2) 粘り強い態度

ロシア人はしばしば自分達を世界で最も忍耐力が強い民族であるという自負を見せる。時間は無制限にあるように振る舞い、時間を味方につける。交渉において劣勢にあったとしても、我慢強さ粘り強さを発揮することで克服出来ると信じているかのようだ。従ってロシア側には時間に拘泥することなく、どんなに時間がかかっても構わないという傾向が目立つ。交渉が遅々として進まず時間だけが過ぎ、相手側は「こちらが妥協しない限り合意が得られない」と感じて焦りを生じる。ロシア側はそれを待つことをいとわぬ。交渉が長期にわたったケースを挙げると、英国とソ連の財産権問題の交渉が開始から64年後の1986年7月に漸く妥結した例がある。ロシア側は、資本主義国家の交渉団には一定の交渉期間内に成果を上げようとする達成意識が強く、また

西側の指導者が自分の任期中に懸案を解決しようと試みる傾向があることを承知してそれを利用していると言える。

ロシアがこのように焦らずに粘り強い交渉を行えるのは、国内において世論やマスコミの批判にさらされることがほとんどなかったからだ。むしろ政策決定者が世論やマスコミをコントロールしてプロバガンダに利用する。ある意味、このような点が民主・自由国家の交渉者に比べ有利であるともいえる。

(3) 土壇場勝負と電撃的提議

ロシアの交渉団は、土壇場の名手 (master of eleventh-hour negotiations) と言える。彼等は交渉が決裂寸前になるまで高飛車に出るのが上策だと考えているようだ。例えば1990年12月、盧泰愚大統領のソ連公式訪問に関する折衝では、訪問1週間前まで首脳会談はじめ外相会談等の主要日程が確定していなかった。盧泰愚大統領の訪ソ日程はいったん12月13日～16日と確定したにもかかわらず、訪問直前になって突然ソ連側がモスクワ到着の時間等の再検討を求め、韓国側を悩ませたのだ。1991年4月に行われた済州島での韓・ソ首脳会談も、最終的に日程が決定したのは開催の10日前である。

1990年12月、盧泰愚大統領のソ連公式訪問の際に署名された「モスクワ宣言」の文案は、盧大統領のロシア到着1時間前に辛うじて合意に至った。この時に問題になったのは過去の歴史、即ち1983年9月の大韓航空機撃墜事件に関連した文言で、韓国側は「過去の悲しい歴史のページに思いを寄せて」(Reflecting on the regrettable pages of the past history)と主張したが、ソ連側の反対で結局「両国の歴史の新しいページを開いて」(Opening a new page in history of their relations)と修正して合意された。

ロシア側は会談の際、本筋とは別の、相手側にとって予期せぬ問題を突如持ち出し、相手を当惑させて交渉の雰囲気为主导しようと画策する場合がある。ロシアの交渉団はたいていの場合、隠された協議事項 (hidden agenda) を懐中に忍ばせて交渉のテーブルに着く。例えば、1991年4月済州島会談において、ゴルバチョフ大統領は韓・ソ友好協力条約の締結を突然提議し、韓国内ではこの電撃的な提案を巡って議論が百出した。これについては翌1992年11月、エリツィン大統領が訪韓して韓・ロ基本関係条約の締結に至った。

また、ロシア側は韓国がモスクワに置く大使館について、建物の提供を重ねて要請していたにもかかわらず消極的な対応であったが、1990年11月に突然ソウル市貞洞にあった帝政ロシアの公使館の敷地問題を持ち出して韓国側を当惑させた。

(4) 一般的合意の志向 (preference for general agreement)

ソ連崩壊後、ロシアも西欧社会と同様に自由民主主義・市場経済という普遍的な価値の追求を標榜しているが、モスクワに韓国大使館を開設した当初は、体制の相違による概念上の食い違いからかなりの混乱を経験せざるを得なかった。言い換えれば、交渉に先立ってまず言葉の概念を明確に規定し、それから交渉に臨む必要があった。ソ連共産党員はもちろんのこと、外交官もともすると「レーニン曰く」と前置きしてレーニン語録を引用するのだが、レーニンは「用語を混乱させろ」と教えたという。実際、社会主義国家でいうところの人民民主主義はプロレタリア独裁の一形態を意味する。第一副首相と第一次官が各々2名以上も存在するとは簡単には納得出来ないことであった。一般的に「第一」と言えば一つしかないものを意味するのに、彼らは「第一」が複数存在しても何ら矛盾を感じない。

ロシア側は細部まで規定した合意よりは一般的な合意 (general agreements), 原則的な合意 (agreements in principle) を好み, 合意を交渉の終結としてではなく, 新しい交渉過程への移行であるとする⁸。ロシアは北朝鮮とは異なり, 相互に合意した内容について全面的に違反することは稀であるが, 履行する過程においては協定文にある抜け穴 (loopholes) や言い回し (wording) を最大限自分の側に有利になるよう解釈し, 自らの主張を押し通そうとする傾向が強い。

1989年11月17日に署名した「大韓民国とソビエト社会主義共和国連邦の間の経済およびその他の関係のための領事業務に関する大韓民国外務部代表とソビエト社会主義共和国連邦外務部代表間の合議議定書」では, 領事處の領事官 (consular officer) は「領事関係に関するウィーン条約」上の国旗掲揚と無線通信の使用を除き, 公式の領事関係に適用される領事特権および免除 (consular privileges and immunities) を有すると合意された。にもかかわらず, 筆者はモスクワの韓国領事處が購入した公用車両に付ける外交官用ナンバー・プレートの発給を受けるのに非常に苦労した⁹。

このようなロシアの慣行を見るたび, ロシアでは原則的合意と合意事項の履行とは別個のものであると思われ, 友好の精神や合意の精神 (the spirit of the agreement) は合意事項の履行には何ら影響を与えないようにも感じた。

日・口間にもいくつかの同様な例がある。1997年11月にシベリアのクラスノヤルスクで行われた橋本龍太郎総理とエリツィン大統領の会談の結果, 「日口両国は東京宣言に基づき, 2000年までに平和条約を締結するよう全力を尽くす」という合意に達したが, 道程はまだまだ遠いようである。

(5) 自己否定的 (self-abnegation) 交渉行動

長期間の交渉の結果, ロシア側は当初の自分達の主張する論理とは矛盾する合意や妥協に至ったとしても, 窮したり困惑する素振りは見せない。言い換えれば, ロシア側は国家利益にかなうのならどんな交渉戦術を駆使しても良いと考えており, それによって相手方を欺瞞したという意識は持たないようである¹⁰。一例を挙げると, 1991年9月, 大韓航空機撃墜事件 (1983年) の犠牲者の追悼式について協議した際, ロシア側は200名以上の遺族等を宿泊させる施設や輸送出来る船舶が無いという理由で大々的な追悼祭を行うことに難色を示し, 非協力的な態度を見せた。しかし韓国側が現地調査に行ってみるとホテルの収容能力は十分にあり, 大型の遠洋旅客船も数隻停泊していた。この事実を協議の席上で指摘したが, 彼等は別段気恥かしそうな素振りも見せなかった。当初の主張を引っ込めていったん立場を変えたとなると, もう彼等はこだわりがなく変わり身が実に早い。こちらが驚かされるほどである。追悼式は同年10月, ロシア側の協力を得てサハリン付近の海域で厳かに執り行われた。

またロシア側は, 当初の主張を撤回したり強硬な態度を軟化させたりする場合, 交渉の代表者を交替する方法を使うことがしばしばある。よって, ロシア側の交渉主要メンバーが交替する場合には, 彼等の主張や姿勢に変化があったものと考えて差し支えない。

その他, ロシアの交渉代表団は国際世論や国内の反応には関心を示さず, 自分達にとって不利な理論や国際慣行等は無視する傾向がある。たとえば1990年3月に韓国政府使節団が訪ソした際のことだ。北方外交の陰の実力者である朴哲彦パウチョルオン政務長官がソ連共産党国際部のブルテンツ首席副部長に盧泰愚大統領の親書を手渡し, ゴルバチョフ大統領からの返書を強く要請した。ブルテンツ首席副部長は北朝鮮との関係等を理由に無理だと答えたが, 朴長官の重ねての要請を受けると, ブルテンツ首席副部長はルバチョフ大統領から盧大統領宛の「口頭の親書」なるものを朴長官に伝えるので, それを盧大統領に伝達してほしい旨を要望してきた。「口頭の親書」なるもの

は国際儀礼上あまり例がない。さらなる交渉の結果、ゴルバチョフ大統領の秘書室長が「口頭の親書」である旨を書いた文書に署名し、それが韓国側に手渡されることになった^{xiii}。まことに奇妙な妥協策であると言わざるを得ない。

同じ1990年10月30日、駐ソ韓国大使館が正式に開設され、筆者は盧泰愚大統領の訪ソ以前に韓国大使の信任状（letter of credence）の奉呈をすませようと急いだが思うように進まず、ようやく信任状の奉呈が出来たのは盧大統領のソ連訪問が終わった後の12月29日だった。国際慣行に反する例として日本関係のものを挙げれば、1992年9月、エリツィン大統領がモスクワを訪問した日本の渡辺美智雄外相との会談日程を、黒海艦隊の視察を理由に一方的に破棄した事実や、日本訪問を訪日の数日前に取りやめたケース等がある。これらは国際慣行にそぐわない一方的な処置の例であるが、エリツィン大統領にはこの他にも国際舞台での奇行のエピソードが多かったのは周知の通りである。

三．基本的対応の方案

1．代償主義（quid pro quo basis）の固守

ロシア人は強い者を尊敬し、権威を重んずる傾向があるので、ロシア人との交渉においては、気後れせず堂々とした明確な態度で臨めば好敵手と認められる。実例を挙げると、1990年3月の段階で韓国側が韓・ソ外相会談を提議するとソ連側の実務者は呆れたような反応を示したが、韓国側は機会ある度に重ねて提議し、1990年9月に至って実を結んだ。もう一つ、北朝鮮のシベリアにおける伐採労働者の人権問題について、韓国側はクレムリンの高位当局者に人権は北朝鮮とソ連との両者の契約よりも上位の概念であると強調して繰り返し交渉した結果、1993年6月に10余名からなる調査団が現地に派遣され、その報告によって伐採所は閉鎖されるに至った。

ロシア側は相手方が堂々と頑強に主張してくれば自らは攻撃的な態度を緩和し、形式的に淡々とした態度で交渉に臨むように見せながら、本質的な問題に関しては「上層部に報告した上で」と引き下がりもする。

このように堂々とした態度を堅持することと併せて留意すべき点は、代償主義を徹底して固守することである。たとえ些少な事項であっても、相手側が反対給付なしに譲歩すればロシア側は感謝するどころかむしろ相手を軽んじ、嵩にかかって無理な要求を持ち出す可能性が大きい。交渉の最終段階でやむなく妥協する場合でも、ロシア側はわずかずつ小出しに譲歩していき、自らの妥協を大きな犠牲を払ったと主張して相手側から最大の見返りを引き出そうとする。反対給付を得ることなく譲歩するロシアの交渉者は、そこで「終りに」なるといわれる。

代償主義を堅持するためにはロシア側に不必要な好意（gesture of good faith）を示してはならない。相手方が好意を見せると、ロシア側は相手の立場がロシアに比べて弱いのではないかと考える。ロシアの外交官は個人的な友情や親密さは交渉とは別個のものと認識している。ロシア側代表の中に個人的に親密な関係にある人物がいる場合、他の代表メンバーがいる前ではそれをあまり表わさないよう留意しなければならない。ロシア外交官養成の中心である国際関係大学では、外交官の身分である限り個人的な友情は禁物であると教育しているという^{xiv}。1991年3月22日、アメリカのリチャード・ニクソン（Richard M. Nixon 1913～1994）元大統領がロシアを訪問した。ニクソンにとって7回目の訪ソであり、生涯最後となった訪問である。この時、筆者はニクソンが「世界経済・国際関係研究所」で行ったスピーチを聞いたが、その中の一節が印象深く記憶に残っている。ニクソンは1950年代半ば以来の米・ソを振り返ってこう述べた。「首脳同士は親しい人間関係を結んでいたとしても、それが自動的に国家間の良好な関係を生むとは限らな

い。実体のない精神はたやすく蒸散してしまうものだ」。個人的な友好関係と交渉は別の事柄であることを忘れてはならない。

2. 我慢強い対応

アメリカの外交官であり政治学者でもあったジョージ・ケナン(George F. Kennan , 1904~2005) は、ロシア人との交渉においては、ロシア側よりたとえ1分でも長く頑張るという覚悟で臨むことを勧めている。忍耐心の限界をテストされていると思ってマラソン交渉に備えなければならない。ロシア側が交渉の冒頭で途轍もない提案をしたり、こちらの主張に対してけんもほろろの応対をするとしても当惑せず、落ち着いた姿勢で辛抱強く応じていれば解決の糸口が見えるものだ。

しかし、短期間で懸案事項の妥結を模索する場合には原則的合意(agreements in principle)で終わる可能性が大きい。この場合、原則的合意を具体的に明文化しない限りその交渉は合意に至らなかったということになる。双方が原則的な合意に達したとしても、そのことをもってロシア側の基本的立場に変化にあったとみなしてはならない。言いかえれば、原則的合意にとどまる限り、ロシアにとって沈黙は受諾ではなく反対を意味することを心に刻んでおかなければならない。それ故、懸案の問題に関しては短期の交渉で早急な妥結を試みるより、懸案は懸案のままに持ち越して長期の課題として存続させていくという態度で交渉を続けて行くことが望ましい。

3. 交渉事案の緻密な準備

ロシアの専門家は、長年にわたって業務に携わるベテラン揃いであり、相当な知識と多様な経験を兼ね備えた並々ならぬ交渉相手であることを留意しておかなければならない。1990年10月29日、韓国の「モスクワ領事館」が大使館に昇格し、本国の訓令により孔魯明(ゴンノミョン)領事館長に対するアグレマンを申請し、同時に領事館長名義で孔魯明大使を代理大使として任命を通告する口上書(note verbal)を発送した。これに対して駐在国の儀典室は「外交関係に関するウィーン条約」第19条1項^vに抵触すると突き返してきて、韓国側を唖然とさせた。これはロシアの国際法専門家が、条約文の細部まで把握し精通していることの例証である。

このような専門家と交渉の席で対峙するためには、懸案の問題に関する徹底した準備と併せて、議論されるであろうと予想出来るその他の事項をすべて拾い出し、それぞれについて綿密に検討しておかなければならない。

1991年4月、ゴルバチョフ大統領の日本訪問を協議する際、日本側は日本の対ソ経済協力を円満に推進するためには、日本国民の対ソ感情を好転させる必要があると主張し、大統領がハバロフスクにある日本人墓地を訪れて献花することを要請した。日本側は粘り強く交渉したが、ソ連側にとっては簡単には受け入れない政治的含み(political implication)のある事柄であった。ソ連側は最終会談まで返答を伸ばした上、日本への出発が迫った時点で日本側の提議を受諾し、併せて長崎訪問の計画を明らかにした。長崎訪問の表向き理由は、ノーベル平和賞を受賞した大統領として被爆地である長崎の平和公園に眠る核兵器の犠牲者たちに頭を垂れるためというものだ。しかし、ゴルバチョフの長崎訪問の真の目的は長崎にあるロシア兵の墓地を訪問し献花することにあった。ハバロフスクの日本人墓地への献花は^{vi}日本の執拗な要求に屈したからではなく、ロシアの日本人墓地と日本のロシア兵墓地の双方に等しく花を供えに行くのだとロシア国内に示し、日本人墓地への献花に対する国内の批判をかわすのが狙いであった。日本側はこの提議を受諾するしかなかった。もとより、大国ソ連の大統領でありノーベル平和賞の受賞者たるゴルバチョフが被爆地長崎を訪れることに反対する理由があろうはずがない。絶妙の策と言える。お

もしもろいことに、日本の主要な全国紙はゴルバチョフ大統領のハバロフスク日本人墓地への献花は大きく報道したが、長崎のロシア兵の墓地への献花については地元の長崎新聞以外、ほとんど触れなかったようだ。このような日本の報道姿勢は、日本国民のロシアを見る目を甘くするのではと思う。

四．終わりに

ロシア側の外交交渉の当事者は、たとえ異なった体制下で成長した人々だとはいえ、信頼と誠実を重要な徳目とみなしている点で我々と変わりはない。従って、相互に信頼関係を構築することが緊要であることは改めて強調しておきたい。ドブレニン大統領顧問は、われらと接触回数が増えるにつれ、時にはクレムリン内部の事情を耳打ちしてくれたり、最高会議の動向や駐米大使時代懐古談を比較的詳細に話してくれたりした。

1990年代初期、通常ソ連の公務員は自宅の電話はもちろんのこと、職場の交換台に通じる電話番号以外の直通電話や内線番号も教えてはくれないほど閉鎖的であった。

ソ連時代、対外政策の決定には共産党の国際部が圧倒的な影響力を持っていたが、共産党解体後はクレムリン当局が主導権を行使して、外務省は依然として執行機関的な性格が強いように見える。対外政策の決定および遂行の成果に関し、議会と世論による民主的コントロールが次第に根を下ろしているに見える最近の趨勢に鑑みれば、クレムリン、外務省のみならず、議会と言論界に対する接触を強化することも望ましいと思う。

長い歴史的な観点から見ると、確かにロシアも改革へ向かって動いてきた。ジョージ・ケナンが正しく指摘しているように、ブレジネフからゴルバチョフへ、ゴルバチョフからエリツィンへ、そしてエリツィンからプーチンへと、政権交代が大量の血を流さずに行われたのは歴史上異例のこと（extraordinary thing）である^{xvii}。

これまで述べてきたように、ロシアの外交交渉は強硬で一筋縄ではいかない手強さとタイムリミットを恐れない忍耐強さを備えている。その一方で、ロシア人は常に交渉の相手を研究して戦略を修正し、状況に応じて対処する相手の手法を学んで同じ手法でやり返してくることもある。交渉におけるロシア人の行動様式には西欧的なものと、ロシアの政治文化に根差した土着のものとも言える要素が交えているようだ。従って、ロシアとの交渉に臨む交渉代表は、交渉する内容に関して専門家であり国際法や外交的な慣行に精通しているだけでは足りない。ロシア人とロシアの政治文化に関する知識と理解を深め、変容しつつある現代のロシアの様相を正しく把握する努力を怠ってはならないだろう。

注

i 1984年4月に韓・ソ双方が相互に貿易事務所の開設を合意し、11月には、一定の領事機能を遂行するため、ソ連駐在韓国貿易振興公司（KOTRA）事務所と韓国駐在ソ連商工会議所事務所に両国がそれぞれ領事處を設置することに合意した。領事處の構成員は両国外務省の公務員とされた。

私は1990年1月末の夕刻、若い書記官とふたりでモスクワ空港に降り立った。1905年に韓露の外交関係が断絶して以来、韓国外交官としては85年ぶりにソ連の地に足を踏み入れたのだった。冬の夕方ということで周囲はすでに真っ暗になっており、韓ソ国交の正式樹立の展望もこのような闇の中だと感じたことを思い出す。ともすれば緊張と心理的な抑圧に萎縮してしまいそう

になる自分を鼓舞しつつ、韓ソ国交樹立への険しい道を踏み出した当時のことは、長い外交官生活の中でも忘れ難いものだ。

- ii ゴルバチョフ大統領は訪韓の際、首都ソウルを訪れることを避けて済州島で盧泰愚大統領と会談した。長年にわたってソ連と関係が深かった北朝鮮に配慮したためと思われる。
- iii ソビエト連邦の構成共和国で形成された国家連合の独立国家共同体 (Commonwealth of Independent States) の略称。
- iv 米国の平和研究所は1994年、「北朝鮮の核開発とそのプログラムに関して米国の政策の挑戦と機会」という特別報告書で、同義語を反復して相手を辟易させる北朝鮮の頑固な交渉態度は、1940年代にスターリンの後ろ盾で誕生した金日成政権が、スターリン式交渉術を熟知していたからだと指摘している。
Scott Snyder *Negotiating on the Edge: North Korean Negotiating Behavior*, United States Institute of Peace Press, Washington DC, 1999, p.3
宋鐘煥『北韓協商形態の理解』, オルム, 2002, pp.127, 184
- v Harold Nicolson, *The Evolution of Diplomatic Method*, London, 1954, p.90
- vi 朴哲彦『正しい歴史のための証言2』, ランドムハウス中央, 2005, p.14
- vii 駐アメリカ大使(在任期間1962年~1986年)。フルシチョフ時代に起こったキューバ危機の際、ソ連を代表してアメリカ側と交渉した。駐アメリカ大使を離任後、ソ連共産党中央委員会書記兼国際部長に就任した。われらとモスクワで面談した折り、筆者の問いに答えて、アメリカ勤務中に接触した歴代大統領の中でニクソン(Richard Nixon, 1913~1994)大統領が最も印象に残っていると答えてくれた。
- viii 崔浩中「韓ソ修交の幕後秘話」, 『月刊朝鮮』1992年9月号, pp.452~455
- ix 1990年2月、筆者はソ連側に事務所兼住宅を早急に提供してくれるよう求めたが、当局の回答はすでに1,000名以上のアパート入居希望申請が出ているので、割り当てには早くても2年はかかるというものであった。しかし繰り返し何度も要請を重ねたところ、3ヶ月後の5月初旬には一家族が居住出来るアパートの提供を受けることが出来た。
- x A Russian negotiator will not view the signing of an agreement as the end of a negotiation, but as a stage in the process. (Raymond E. Smith, “*Negotiating with the Soviets*,” Indiana University Press, 1989, pp.72~76)
- xi ソ連駐在外交官の車両番号は公館設置の順番によって決まる。例えば最初に公館を設置した英国のナンバーはCD 01, 二番目のドイツはCD 02である。当時、発給済みの外交官車両番号の最後のナンバーはアラブ連盟のCD 122であったため、韓国の番号はCD 123になるものと考えていたのだが、ソ連外務省韓国課長によると、CD 123を付与するとソ連と韓国との早期の修交を示唆することになるため、容易には決定出来ないということだった。それならと筆者がその場でCD 300ならどうかと提案したところ、ソ連側は大いに面食らったようだった。数日後に発給された車両番号はCD 124番であった。
- xii 冷戦時代、ソ連封じ込めを柱とするアメリカの冷戦政策の設計者と称されるケナンは、ロシア人の指導者について、「日和見主義で節操もなく、手段を取り替え、真理を無視し、暗い秘密主義を守り、そして何よりも高い精神に裏付けられたイデオロギー上の信念という仮面の裏に、いつでも彼らは権力欲を隠し持っていた」と記している。(George F. Kennan 『ジョージ・F・ケナン回顧録 対ソ外交に生きて (上)』清水俊雄訳, 読売新聞社, 1973年, p.72)
- xiii 朴哲彦, 前掲書, pp.156~158
- xiv 筆者は2007年の夏にモスクワを再訪した。その折り、以前とても親しく付き合ったことのある

る北朝鮮駐在ロシア元大使を夕食に招待したかったが、食事に応ずるところか筆者と会うことさえ避けたい様子で、ついに再会はかなわなかった。ソ連崩壊直後とは異なり、最近ではロシア情報当局による監視が厳しくなっているのを感じた。

日・ソ関係に関連した例を挙げてみよう。1940年10月8日、駐ソ東郷茂徳大使の官邸で催された離任の昼食会に首相兼外相であるモロトフが参席して3時間以上も長居したため、モスクワ駐在の外国特派員にセンセーションを巻き起こしたことがある。モロトフがモスクワ駐在の外交公館に赴くのは異例のことであったという。

(東郷茂彦『祖父東郷茂徳の生涯』、文芸春秋、1993、pp 221 + 222)

また1941年6月13日、松岡洋右(1880~1946)外相が日・ソ中立条約の調印式を終えてシベリア鉄道に乗るためにヤロスラブリ駅に来た際に突然スターリンが何の予告もなく、極めて異例的な見送りに現れた。(デービット・J・ル - 『松岡洋右とその時代』長谷川進一訳、ティビーエス・ブリタノカ、1981、p 307)

xv 使節団の長が欠けた場合又は使節団の長がその任務を遂行することが出来ない場合には、臨時代理大使又は臨時代理公使(chargé d'affaires ad interim)が暫定的に使節団の長として行動するものとする。その臨時代理大使又は臨時公使の氏名は、使節団の長又は、使節団の長がすることが不可能な場合には、派遣国の外務省が接受国の外務省に通告するものとする。

xvi ゴルバチョフ自身はハバロフスクの日本人墓地献花について「和解の印であり、長年の敵対関係に終止符を打つ意思表示であった」と述べている。(ミハイル・ゴルバチョフ『ゴルバチョフ回顧録 下巻』工藤精一郎・鈴木康雄 訳、新潮社、1996年、p 324)

xvii Strobe Talbott, *The Russia Hand: A Memoir of Presidential Diplomacy*, Random House, 2002, p.401